

近世女人の碑文

——大塚先儒墓地のなかから——

近世、碑文を録したものは数多いが、女性のものが少ないのは当然のことかとも思われ、先にもいくつかをあげたが、このたびも、それについて述べてみたい。

東京は小石川、大塚護国寺の裏手にある「大塚先儒墓地」(文京区大塚五一三—二)は、初め、享保十九年(一七三四)八月十二日ね幕府の儒官室鳩巢が没して、此の地に葬られて後、寛政の三博士柴野栗山・岡田寒泉・尾藤二洲の三人連署して儒礼を以て葬むられんことを願ひ、古賀精里もまた墓域相接し、その子女をも付葬したが、明治に至りその墓域の煙滅をおそれた諸家の働きにより、「大塚先儒墓所保存会」が発足し、寄付金を募り、墓地を整理して大正四年(一九一五)維持費をそえて、東京市に寄付し、「修築大塚先儒墓記」が立てられた。このことについては保存会の報告書に詳しい。

柴 田 光 彦

これだけ儒者関係のまとまった墓所は珍しく、俗に儒者捨場と云われていたという。大正十年(一九二一)国指定史跡に指定され、今時大戦の戦禍にも免れて、保存されている。多くの古い墓蹟が、殊に著名人のものは何らかの保護措置が加えられているが、その他のものは種々の理由により消えて行く現在、この一群の墓がその家族のものを含めて史蹟として残されていることは貴重なことである。現存の墓は、大は右の先儒墓記の二三〇センチより、小は五〇センチに満たない嬰兒の墓を含めて六三基を数える。概ね質素で、小さいものは台石がなく直に立っていて、博士のものでも、二段、夫人のものは一段のものが多し。その子女の墓には、碑銘の有無両様があるが、ここではその内のいくつかをともに併せ掲げてみることにした。

夫人の墓表に多く記されている「孺人」の語は、妻の通称であるが、孺は属で、従属の意であるから、今日の女性にはふさ

わしくないかも知れぬが、「礼記」曲礼下には「諸侯曰夫人、大夫曰孺人」と見える。当時に於いては敬称であった。

墓域内の群は、石質や種々の理由から、可成りの傷みのあるものがあり、殆ど欠損しているものも見受けられる。幸いに先学鶴田勢湖氏がやく「墓蹟」第二・三輯（大正十五年七月、昭和六十年 有明書房 復刻版がある）に発表されていて、記録の上から剥落部分を補うことが出来る。なお、氏が不明として□で表している文字については、私の手拓をもって殆んど補うことが出来たと思っている。

本稿に掲げた碑銘中、「」をら付した部分は剥落して、現在には全く読むことの出来ない箇所である。記述にあたっては特別の一、二の墓石をのぞいて、書下しを省略して、読点のみを付した。なお、引用碑文中の／は行移りの印である。

一、木下順庵関係

墓域内の「修築大塚先儒墓記」（大正四年五月）に「郊外池上村有木下順庵先生墳墓隘陋、特甚乃移葬於此地」とある。木下順庵（元和七—元禄一。一六二〇—一六九八）、の「采恭靖先生之墓」、同貞簡（寛文六—寛保三。一六六五—一七四二）の「貞簡（木先生之墓）」に並んで、夫人の墓がある。貞簡は、順庵の次子平三郎菊潭の諡号。

貞幹夫人墓 棹石、高八二、巾二三・五・横一五センチ

（碑表）

「日野貞叔孺人墓」

（碑左側）

「顯妣姓藤原氏日野、諱阿介、日野玄蕃女也、延寶七己未／歳（二六七九）三月十四日生、享保十己巳歳（一七二五）四月二十一日終、享年／四十七歳、有二男三女、擇日、葬于武州荏原郡堤傍村 / 顯祖考恭靖先生墓左 哀子木廣道立」

*墓銘四行。顯妣は亡母の尊称、顯祖考は祖父の尊称。

二、室鳩巢関係

一 鳩巢夫人墓

棹石、高五九・五、巾二三・五、横一六・五センチ

（碑表）

（碑左側）

「室鳩巢先生妻故若森氏之墓」 「寶曆四甲戌歳八月廿四日」 室鳩巢は木下順庵門で加賀藩に仕え、のち幕府の儒官として殿中侍講として八代將軍吉宗に仕えた貢献するところが多かったという。墓は師の木下順庵の西に並び、楷書で「鳩巢先生之墓」とのみ刻されている。夫人の没した宝暦四年は夫の没した翌年、西暦一七五四年にあたる。

二 鳩巢の嗣孔彰夫人の墓

棹石、高六七・五、巾二二、横一七センチ

孔彰は宝永三年（一七一六）に生れ、元文四年（一七四九）、父鳩巢没後六年で病歿した。享年三四歳。その墓の表に「勿軒室



君之墓」、碑銘は三面に各三行、一行一七字、で刻され、文中に「年止三十四。娶大田氏生直恒。天之所祚其在耶」とある。

(碑表)

「室孔彰妻故大田氏之墓」

碑銘、左側(三行)・後面(四行)、一行一七字

(碑陰)

「故鳩巢先生、嗣子孔彰君配大田氏、考醫官／ト沅翁世仕 公朝、妣淺井氏、寶永庚寅十一／月生、元文丙辰十一月十一日病卒于室氏私」第、享年二十七、其歸室氏違事先生、及先生歿／奉姑大孺人、婦道甚修、有一男、尚幼、素有至性立／心貞淑、故大孺人亦愛之、其卒也、深惜之、命／孔彰君、使其門人川口光遠記其墓云、

(読下し)

故鳩巢先生の嗣子孔彰君の配大田氏、考の醫官ト沅翁は世々公朝に仕ふ。妣は淺井氏。寶永庚寅(七年一七三〇)十一月に生れ、元文丙辰(元年一七三六)十一月十一日、室氏の私第に病卒す。享年二十七。其の室氏に歸(トツ)ぎ先生に違事す。先生の歿するに及び姑の大孺人に奉ふ。婦道甚だ修む。一男有り。尚幼、素より至性立心有りて貞淑なり。故大孺人亦た此を愛し、其の卒するや、深くこれを惜み、孔彰君に命じて其の門人川口光遠に其の墓を記さしむと云ふ。夫孔彰の死に先立つこと三年であつた。

三、柴野栗山關係

柴野栗山の孺人藤田氏阿順については、既に先稿で触れたが、再録することにする。

一 栗山夫人の墓

棹石、高八八、巾二九・五、横一七・五センチ

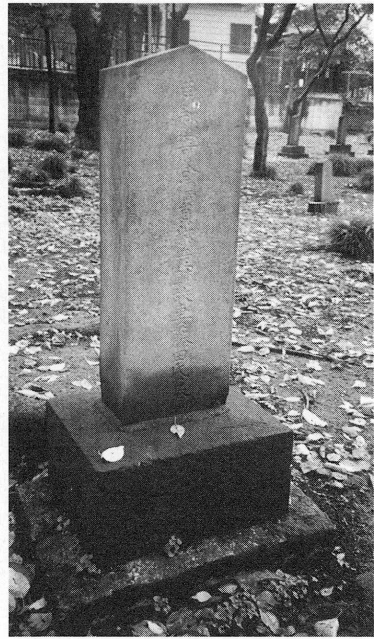
(碑表)

「東都寄合儒員柴彦輔故藤田氏墓」

(碑裏)

二一・二六行に刻す。

「孺人、姓藤田、字阿順、小濱酒井侯京邸吏和左衛門□／諱義知之女、而東都寄合儒員柴邦彦彦輔之妻也、寶／曆二季生、于平安小濱藩第、安永元年正月歸于柴氏／天明八年四月從家徙東都、寛政六年九月二十日以／病卒于駿河臺柴氏第、二十



二 貞毅夫人の墓

棹石、高八七、巾三〇、横一六・五センチ

(碑表)

「讚岐故陰士養貞軒柴小輔室須山氏墓」

(碑裏)

一一〇字六行に刻す。

「孺人姓須山、字阿安、讚岐陰士伴右衛門某女、而陰／士柴府君小輔、諱貞毅之室也、寶曆二季生于讚岐／牟禮村、歸于柴氏、而生五男三女、寛政七年來東都／八年七月五日、以病卒于駿河臺、八月九日葬城北／大塚村、」

(読下し)

孺人、姓須山、字阿安。讚岐の陰士、伴右衛門某の女、而して陰士、柴府君小輔、諱貞毅の室なり。宝曆二年(一七五二)讚岐牟礼村に生れ、柴氏に帰きて、五男三女を生む。寛政七年來東し、八年(一七九六)七月九日、駿河台に病没す。八月九日、城北大塚村に葬る。

栗山に子なく、弟貞毅(養貞軒)の子供達(上の男子は夭折)をつぎつぎと養子とした。七歳で養われた允升(碧海)の『家世紀聞』に「孺人年二十にして、來つて養父貞君に嫁す」とあるが、森統三氏は一年繰り上げた明和七年(一七七〇)の十九歳で嫁したとする(著作集八・続集二)。貞毅は京で産科を修め、帰省して業としたが、天明六年(一七八一)に没し栗山はまた、娘の菊を養い、八年には允常(方閑)も子とした。栗山の妻お順は寛政六年に病没し、子供を撫視するものなく、またお安も末娘

四日権厝于城西牛込村／林氏別荘、八季八月八日改装于城北

大塚、

(読下し)

*第一行右下□欠け。「君」カ。

孺人、姓は藤田、字は阿順。小浜酒井侯賞京邸吏、和左衛門□、諱は儀知の女にして、東都寄合儒員、柴邦彦彦輔の妻なり。宝曆二年(一七五二)平安小浜藩の第に生まれ、安永元年(一七二二)正月、柴氏に帰ぐ。天明八年四月(一七八八)、家に従いて東都に徙る。寛政六年(一七九四)九月二十日、病を以て駿河台柴氏の第に卒す。二十四日、城西牛込村林氏別荘に権に厝(置き、八年(一七九六)八月八日、城北大塚村に改葬す。

を失ったので、栗山は江戸に呼んだが、僅か一年にして亡くなった。養子の兄の碧海は昌平饗に学び、阿波藩儒となり、後阿波に移住しているが、弟の方閑は幕府御書院番となり、墓は母の側にある。

〔柴野方閑俗名新左衛門平允常墓〕（碑表）、「嘉永二酉八月廿四日」（碑陰）。

なお同墓域には歿年命日省略するが、「柴野勇次郎之墓」「徳女之墓」「柴氏女阿對之墓」「柴野權之丞墓」「柴野弥十郎妻墓」「柴野弥十郎家女墓」と並び建っている。いずれも細く小さな墓標であり、それらの系譜関係については私は未だ知りえないままである。

四、尾藤二洲関係

尾藤二洲（延享四—文化一〇。一七四四—一八二三）は伊予の生まれ、大阪に出て、さらに江戸に召されて昌平饗の儒官となり、三博士のうちに数えられた。

一 初配猪川氏の墓

棹石、高八六・五、巾三〇・八、横二〇センチ
始めの夫人は猪川氏で、二洲の墓碑銘には「初配猪川氏、生三女、其一嫁岡田真澄、其二夭」とあるが、彼女の墓石には表に次のようにあるだけである。

〔尾藤志尹故妻猪川孺人之墓〕

二 次配飯岡氏の墓

棹石、高七四、巾三〇、横一八・五センチ

次配は飯岡氏である。同じく二洲の墓碑銘には「次配飯岡氏、生四男一女、曰松、曰栗、曰栗、曰高爲継、曰乙亦天、女嫁米田正幸」とある。墓の表は剥落して読めない。

〔飯岡孺人之墓〕（碑表）

〔孺人飯岡氏二洲先生後〕／配也天保壬申（一八七〇）八月五日卒（碑陰）

三 二洲の子女の墓

子供の子は四基あるが、三人は男児で、女児は「苑」一人である。棹石、高五七、巾二五センチ、碑陰に刻はない。

〔尾藤氏女苑墓〕

四 母西山氏の墓。

棹石、高九〇、巾三〇・八、横二一センチ

（碑表）

〔太孺人西山氏之墓〕。

（碑陰）

〔太孺人西山氏、伊豫宇摩郡川江人、實際居士、諱定鑿之女、温／洲居士尾藤君諱宣邕之配、生三男、長男孝肇志尹、一名良佐、次／孝常仲格、次孝章闇叔、一女適大阪醫福田氏、太孺人性端慤（心正しく誠意があり）／寡言、善事舅姑、先君晚年多病、扶持尤勤十餘年如一日、既老／從孝肇來江戸、食其

禄養十五年焉、以文化丙寅（三年—一八〇六）四月十六日、終于昌平阪官舎、壽八十、葬城北大家里之原

孝子孝肇建

なお、二洲は西山氏の墓の後ろに文化十年八月に「尾藤氏遺徳阡」と題する尾藤氏代々の顕彰碑を建てている。この碑によると、先考温洲官邕は安永九年庚子（一七八〇）六五歳で大阪で没し、墓は城南の長楽寺に在るといふ。

五、古賀精里関係

古賀精里（寛延三—文化一四。一七五〇—一八一七）は佐賀の生まれ、京・大阪に学び、帰国して藩校の教授、のち幕府の儒官となった。その墓は高さ一〇六、横四三センチ、墓は表に「精里古賀先生之墓」とあり、墓銘は「門人神戸城主藤原忠升」（本多氏）の撰、子煜（侗庵）の書になり、一面、三〇字、一二行で、三面に記されている。その碑面には「配光増孺人、先十三年卒、後不再娶、不蕃姬妾、生三男六女」とある。

古賀氏の侗庵・茶溪の子女の墓に銘文のあることは、他にあまり例を見ない。あるいは刻されても時代とともにそれらの多くは無縁塔に整理されてしまったのかも知れない。古賀一族の子女の墓銘の多く残るのは、特に「先儒墓所」として保存されたためであろうか。なお因みに記すならば、京都嵯峨二尊院の古義堂伊藤家の墓碑群の中にも、孺人の墓銘は見られるが、童幼のそれを知らない。次々と夭折した子女への格別哀惜の念の

強かつた故であろうか。

一 古賀精里夫人墓。

棹石、高九〇、巾三〇センチ

「古賀樸故妻光増孺人墓」とのみあつて碑銘はない。樸は精里の名である。

二 古賀侗庵夫人墓

棹石、高六五、巾二七センチ

侗庵（天明八—弘化四。一七八八—一八四七）は精里の末子、三男。名煜、字季曄。と江戸に出てその墓碑は高さ二三〇、横一一二センチ、篆額に「侗庵／古賀／先生／之墓」とあり、五三字、二五行を数える。「安中城主板倉勝明撰文」「子増（茶溪）書」で、中に「配鈴木氏、有閨徳（婦徳）、生子三、長即増（謹一郎、茶溪）、以文行知名、……次培多病、次麟天、女四、長適廳下士飯河忠信、其三皆夭、側室林氏生二子、慎勉皆夭」とある。

その夫人の墓は表に「古賀煜妻鈴木孺人之墓」、裏に「明治十二年二月六日歿」とのみある。また側室の墓は不明である。

三 侗庵子女墓

*参考のため、男子の墓も掲げる。

1 「古賀煜第三子麟二郎墓」

碑銘は碑陰に二〇字、八行に刻す。

「麟三郎、古賀煜第三子、母鈴木氏、文政八季（一八二四）十月廿五／日夜生、九年六月十五日雞鳴夭、先是患吐乳變／爲驚風遂不救、鱗眉目秀朗、性寛祐、不甚啼哭、故致／家人憐

惜、天時類行哭告聲、葬小石川先君兆次、予／告以十絶、其
一日、泪没羞予忝祖先、癡心日夜望兒賢、瓦全玉碎眞懸絶、
手理相同尔偶然、麟両掌皆横一文、與予同故云、／天保十一
季（一八四〇）庚子 古賀煜識

2 「古賀煜第二女阿歌之墓」

碑銘は碑陰に一七字、七行に刻す。

「阿榮、古賀煜第二女、母鈴木氏、文政十一年（一八二八）／
十月廿日生、明年六月八日夭、初患感冒、無／幾苦、吐乳遂
亡、予喪兒麟、後生阿榮、故視小／掌珠、清鐵保詩、中年生
女作兒、看可謂寄獲／我心、泪亡悼惜甚亦見予之裏、葬小石
川附／先塋、／天保十一季（一八四〇）庚子 古賀
煜識」

3 「古賀煜第三女阿歌之墓」

碑銘は碑陰に一六字、六行に刻す。

「阿歌、古賀煜第三女、母鈴木氏、天保二年（一八三一）／六
月廿四日生、五季五月十九日夭、葬小石川先君之墓次、資性
婉嫻（エンエイ、從順）、於阿母傳婢／如恐傷、其意故特見字
愛、壬申（天保三年）秋」患吐乳／殆危、幸而痊、後病馬脾
風、遂溘亡、／天保十一年（一八四〇）庚子 古賀
煜識

4 「古賀煜第四女阿貞之墓」

同右

「阿貞、古賀煜第四女、母鈴木氏、天保六年（一八三五）／十
二月八日生、八年八月二日夭、前月中／吐乳遂溘逝、鈴木氏

産兒、培後肝氣苑／結、腹生巨塊、爾來所誕咸不育、阿貞最
脆弱、／嬰疾無幾亡、葬小石川先塋之旁、／天保十一
季 古賀煜識 子増書

5 「古賀煜第四子勉四郎墓」

碑銘一一字、五行。

「勉四郎、古賀煜第四子、母侍／婢林氏、天保七年十二月廿
／二日生、廿四日夭、從塋小石／川先塋之側、天保十一季
／ 古賀煜識 子増書

6 「古賀煜第五子慎五郎墓」

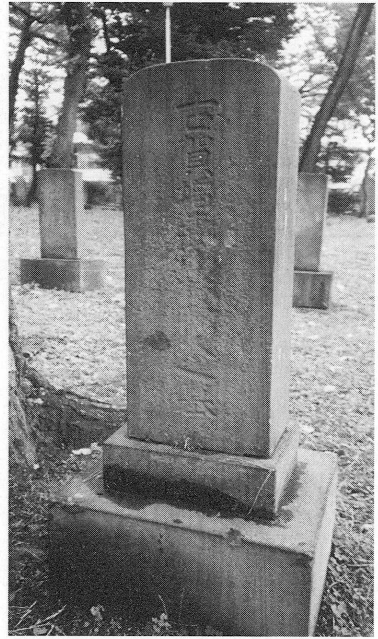
碑名一五字、七行。

「慎五郎先君第五子、天保十一年庚子六月十日夭、十二、季
辛／丑四月廿七日葬小石川先墓左穴、歷／年久尚記弟色頌憶、
先君同胞八人皆／長育、子姓繁盛、／予姉妹諸弟通九人、其
／六人皆亡于襁褓中、家世不幸莫大焉、」元治元年（一八六四）
甲子四月 兄古賀増誌

四 茶溪夫人ならびに子女の墓

侗庵の長子茶溪、通称謹一郎（文化二三一明治一七。一八一六—
八四）は、儒学の他に洋字も修め、昌平黌の儒官から、後に蕃
書調所頭取となる。露使長崎來航、下田条約に関与したが、維
新後は新政府に徴されたが応じなかった。享年六九歳、墓は大
正三年、大塚先儒墓所保存会によって建てられたが、その碑文
には妻子の記述はない。

茶溪の子女の墓に銘文の多いのは、多く夭折したため殊に哀
惜の念が深かったためと思われる。殊に二女、四女・五女と続



けて亡くし、墓石の建立も同時であるのも痛ましい。また長女阿琴は成人して、期待を背負い、婿取りまでしたが、やはり若死にであったがため、また格別の感があったのであろう。三女の墓の内のはは無事に育って嫁いだのであろうか、その伝を知らないが、五女阿直の墓銘に「小姉阿鶴」とあるのがその人のようである。

1 茶溪夫人墓

棹石、高六四・五、巾二六・七。横一七・五センチ

「古賀増妻〔小林孺人〕之墓」(碑表)

「明治十九年九月四日歿」(碑陰)

表は剥落して全く読めない。鶴田氏により補う。

2 長女阿琴之墓

高一三四、巾底辺八〇、銘文粹、

縦九二、横四六、厚凡三〇センチ

阿琴の墓は、中央上部に篆額(三〇×二二)があり、碑文も長分で、行三〇字、一五行に刻されている。格別の扱いであるので、碑に即して掲げることにする。(碑の改行と組みと同じ)

「筑後守古／賀増長女／阿琴之墓」(篆額)

「阿琴我長女即義子銳初配室人小林氏出天保十二年辛丑九月十五日生

先人鐘愛賜名曰阿琴慶應四年戊辰四月三日亡季僅廿八春來國事日

非官使旗人眷族避四郊女憂懼預悲其与予及銳兒別悵々不樂二月初八

俄罹疾全身痿不能動起臥飲食皆需人昏々睡不止病五十五日享盡煩悶

苦楚遂逝痛夫女自幼多病服藥無數屢至重篤之極而免似厄難中自有福

分今病固非必死之症合家日望平快而不救予實哀其不幸也女貞靜寡言

跬步不踰閑初不解世間狡詐貪鄙之行終身不吐虛妄言雖弱體董臨一家

儘足稱賢夫人性孝父母所命生來未會一違予出行或遠役女想慕弗已相見則安五年前銳兒人贅兒循謹女柔婉琴瑟調和家中无間言爲老年一大樂何料一豎逞虐以涕代咲女眉目秀朗體如十七八歲小娘子今春錯認腹塊爲妊始染牙去眉飲食微少別無嗜好只喜吃芬病間精神恍惚尚索煙吸服女既弱予與室人愛護刻不忘於心雖長大猶宿昔幼時每風寒暑濕常恐蒲柳之質不能支嗚乎女悲生別離以釀病今反化死別離予之衰腸寸々裂也銘曰女也何死非其季呼之不來淚潸然聲容在目不能忘鬱々松楸隔重泉慶應四年戊辰四月 父 筑後守古賀增 誌 廣瀬群鶴刻

(付読点)

〔筑後守古賀増長女、阿琴之墓〕(篆額)

阿琴我長女、即義子銳初配、室人小林氏出、天保十二年辛丑九月十五日生、先人鐘愛、賜名曰阿琴、慶應四年戊辰四月三日亡、季僅廿八、春來國事日、非官使旗人眷族、避四郊、女憂懼預悲、其予及銳兒別、悒々不樂、二月初八、俄罹疾全身痿、不能動、起臥飲食皆需人、昏々睡不止、病五十五日、享盡煩悶、苦楚遂逝、痛夫、女自幼多病、服藥無數、屢至重篤之極、而免似厄、難中自有福分、今病固非必死之症、合家日望平快、而不救、予實哀其不幸也、女貞靜寡言、跬步不踰、閑初不解世間狡詐貪鄙之行、終身不吐虛妄言、雖弱體、董臨一家、儘足稱賢夫人、性孝父母、所命生來、未曾一違、予出行、或遠役、女想慕弗已相見、則安五年前、銳兒人贅兒、循謹、女柔婉琴瑟調和、家中无間言、爲老年一大樂、何料一豎逞虐以涕代咲、女眉目秀朗、體如十七八歲小娘子、今春錯認腹塊、爲妊始染牙、去眉、

飲食微少、別無嗜好、只喜吃芬、病間精神恍惚、尚索煙吸服、女既弱、予與室人愛護、刻不忘於心、既雖長大、猶昔幼時、每風寒暑濕常恐、蒲柳之質不能支、嗚乎、女悲生別離、以釀病、今反化死別離、予之衰腸寸々裂也。銘曰。女也何死非其季。呼之不來淚潸然。聲容在目不能忘。鬱々松楸隔重泉。

慶應四年戊辰四月 父 筑後守古賀増 誌 廣瀬群鶴刻

(讀下し)

筑後守古賀増長女、阿琴之墓

阿琴は我長女、即ち義子銳の初配、室人小林氏より出づ。天保十二年(一八四二)辛丑九月十五日生る。先人鐘愛して、名を賜りて阿琴と曰ふ。慶應四年(一八六九)戊辰四月三日亡ず。年僅か廿八なり。春來國事日々、官に非らざるは旗人眷族をして、四郊に避けしむ。女(ムスメ)は憂い懼れ悲しみに預る。其の予及び銳兒と別れ、悒々として樂しまず。二月初八、俄に罹疾し全身痿へ、動くこと能はず。起臥、飲食皆人に需む。昏々として睡り止まらず。病むこと五十五日、煩悶を享け尽し、苦しみ楚(イタ)み、遂に逝く。痛ましいかな。女は幼より多病、服藥すること無數、屢々重篤の極に至る。而して免似厄難中、自ら福分有り、免かるるに似たり。今病は固より必死の症に非らずと、合家日に平快を望むも、而し救へず。予、実に其の不幸を哀れむなり。女は貞靜寡言、跬步(半歩)を踰へず閑なり。初め世間の狡詐貪鄙の行を解せず、終身虚妄の言を吐かず。弱体と雖も、一家を董臨し、儘(ママ)賢夫人と稱するに足れり。

性、父母に孝、命ずる所、生來、未だ曾つて一も違へず。予、出行、或は遠役、女、想慕して相見ることを已まず。則ち安んぞ五年前、鋭見人を贅兒（婿）とし、謹で循（シタガ）う。女は柔婉、琴瑟調和し、家中に間言なく、老年となり一大楽たり。何ぞ料らん、二豎（こども）逞虐以て涕を咲いに代う。女は眉目秀朗、体は十七八歳の小娘子の如し。今春、腹塊を錯認し、妊と為し、始めて牙を染め、眉を去る。飲食微少、別して嗜好なく、只吃分を喜ぶ。病間精神恍惚し、尚ほ索煙吸服す。女、既に弱り、予と室人と愛護して、刻も心をわすれず。既に長大すと雖も、猶ほ昔の幼時を宿す。毎に風寒暑湿、常に蒲柳の質を支へ能はざるを恐る。嗚乎、女、生別離を悲しみ、以て病を醸し、今反つて死別離と化す。予の衰腸寸々に裂くるなり。銘に曰く

むすめや、何ぞ死するに其の年あらん。これを呼べども来らず、涙潜然たり。

声容目に在り、忘るる能はず。鬱々たり松楸（きささげ）重泉（黄象の国）を隔つ。

慶應四年戊辰四月

父 筑後守古賀増 誌

廣瀬群

鶴刻

以下、二女・四女・五女、三人の墓は、五女阿夏の墓と同じ時の造立で、棹石のみで、大きさも六二前後、巾二四、凡横一七センチ、二女のは埋まっついていて鶴田氏に



よらなければ全きをえなかつたが、生まれたばかり、また三歳に満たずに続けて愛児を失つた父親の墓銘は哀切を極めてゐる。

* 台石の多くは埋もれている。

3 「古賀増第二女阿婉之墓」

碑銘、一六字、七行に刻す。

下三字埋没。

「阿婉吾次女、室人小林氏出、天保十四季（一八四三）／癸卯五月三日晝誕、七月十一日 卯殤、齏（黄痘力）／而端生數日、克定晴視人、已而 胡盧咲（口を覆うて笑う）／而動手足、類成童、家人以爲慧、先君子賜／名阿婉、罹吐乳症、岿秋熱如灼、病十一日、遂亡、可憫也、葬諸小石川祖塋 元治元年（一八六四） 甲子四月 父古賀増志」

4 「古賀第四女阿夏之墓」

碑銘、一七字、七行に刻す。

「阿夏吾第四女、側室高橋氏出、安政六年（一八五九）己未二月廿二日生、六（月廿七）日夭、葬小石川／之阡、白誓大眼、能眠不號泣、合俗傳強健之／徵、予悅、只頭有胎瘤、待消退、種痘細疹續發／痘、不旺以亡、予弄瓦不弄璋、既不幸亦足慰、／膝下索莫奈天慳、其年不久留、人間酷夫 元治元年（一八六四） 甲子四月 父古賀増志」

5 「古賀増第五女阿直之墓」

碑銘、十七字、七行に刻す。

「阿直吾第五女、副室高橋氏出、生文久元年（一八六一）／辛酉二月廿一日、殤元治元年（一八六四） 甲子二月七日、葬先墓之兆次、女脆弱、暨與保母盡力護／視、僅延四歳之壽、性

敏且婉、好潔有至行、與／小姉阿鶴、嬉必以美物讓、舉家鐘愛、症變奄／逝、予季衰感甚、作十絶哭之、終不能抒悲懷／也、元治元年甲子四月 父古賀増志」

6 「正七位古賀銳之墓」

棹石、高五四、巾二四センチ

「明治（十八年（一八八五）十二月廿）一日歿」

義子銳の享年は不明であるが、仮に阿琴と同年にしても四十五歳の人の墓石としては余りに淋しく、妻であつた阿琴の墓との違いに驚く。また傷んで見る影もない。義父の増（茶溪）は前年の明治十七年の歿、小林孺人は翌十九年の歿、明治になつて隠棲して逝つた茶溪の墓が、先儒墓所保存会によつて建てられている所以であらうか。

因みに「古賀鋭長子秀太郎之墓」「明治六年六月四日歿」・「古賀鋭長女阿正墓」「明治八年六月三十日歿」・「古賀鋭五子清之墓」「明治廿八年八月七日歿」・「古賀鋭二女阿力墓」など、碑の頭部の違いはあるが、大きさは茶溪の子供達と同じく高さ六二、三、巾二四センチの質素なものである。

注

「近世碑文雜稿『栗山文集』墓銘抄―村山夫人の墓など」

「跡見学園女子大学国文学科報」二四 平成八年三月

「近世女人の碑文―油屋倭文子・谷幹々・頼梨影の墓碑銘」

「跡見学園女子大学紀要」三三 平成十二年三月